

⑤ 佐藤 徳 一 氏（択捉島元島民）



私の生まれた択捉島のことをお話ししたいと思います。

私は昭和 14 年に択捉島の具谷（ぐや）というところで生まれ、昭和 22 年 8 月まで暮らしていました。

択捉島は、戦後の昭和 20 年 8 月、ソ連軍が侵略し占領しました。そのとき、私は 7 才でした。その後、樺太（サハリン）に連れて行かれ、樺太にはおよそ 1 か月間収容され、それから函館に引き揚げてきました。北海道に上陸後の 10 月ころには知り合いを訪ねて青森方面に向かいました。日高管内の門別を第二のふるさととして暮らすまでは、満足に定住することはなかったのです。各地を転々とし、今は北見市に住んでいます。

北方領土は、根室の東に位置し、歯舞群島、色丹島、国後島、そして私が生まれた択捉島があります。昭和 20 年、ソ連軍は択捉島の留別村に上陸し、それから南下し、北方領土のすべてを占領しました。

根室から一番近いところは、貝殻島（かいがらじま）で、わずか 3.7 km しか離れていません。色丹島は根室から 73 km、国後島は根室から 47 km、択捉島は根室から 150 km くらいのところに位置します。

島の面積と当時の人口ですが、歯舞群島は 100 km²に 5,281 人、色丹島は 253 km²に 1,038 人、国後島は 1,499 km²に 7,364 人、択捉島は 3,184 km²に 3,608 人が住んでいました。

択捉島の主な産業は水産業が主体で、資源の宝庫で、7、8 割くらいの島民が漁業関係に従事していました。ほかの人は学校、郵便局、警察、無線所、発電所、駅逓、神社、お寺、病院などに従事していました。

労働力は人間と馬の力です。当時、島には重機などの機械はありません。馬が最大の労働力でした。

水産業は、サケ、マス、タラ、海草類、タラバカニが中心で、前浜に網を仕掛ければ、それらの魚がたくさんかかります。ほかに孵化場、木材関係の加工場などがありました。

交通手段は、徒歩か馬です。冬は主に馬そりで移動しました。私が島で生活していたときは、

電気がなかったので、街灯などはなく、夜は真っ暗です。加工場などでは発電機を使用し営業していました。

当時の私の家のことをお話したいと思います。私の住んでいた具谷には、当時、30戸くらいの世帯がありました。私の祖父は函館で漁師の仕事をしていましたが、1871年に択捉島に移住しました。祖父は私が生まれた年に亡くなりました。父が2代目を継ぎましたので、仮に私が択捉島に住んでいたら、3代目を継いでいたと思います。

当時の生活状況は、みな木造の一軒家に住んでいました。私の家は細長い家で、真ん中が中庭になっており、そこに作業用の小川を通して、その小川で茶碗を洗ったり、洗濯などをしていました。家の半分は母屋、その他の半分は土間や馬小屋などとして使っていました。なぜ馬小屋があったのかというと、私の家では綱元をやっていたため、船を巻き上げるときなどに馬の力を利用していただけです。また、何かあると馬を利用していました。私の家では馬を6頭飼っていました。



そんなごく普通の生活をしていたのですが、昭和20年8月に突然ソ連軍が攻めてきました。

択捉島には昭和20年8月28日に上陸、その後、国後島には9月1日、色丹島、歯舞群島には9月1日から4日までに上陸し、すべての島を占領しました。最初、島民はアメリカ軍がくるものと噂していました。ところが見たこともない艦艇でソ連軍がやってきました。北方領土付近にはアメリカ人がきていないことをソ連側が察知して攻めてきたようです。ソ連軍は実際は釧路から留萌までの北海道の半分を狙っていたそうです。幸い、9月上旬にアメリカ軍が急きょ、小部隊を根室方面に配置したことから、ソ連軍は北海道へ上陸できなかったようです。

私の住んでいた具谷のそばには単冠湾（ひとかっぱわん）という大きな湾がありました。真珠湾攻撃の際、日本の連合艦隊が集まり、ハワイに向けて攻撃したところでした。昭和16年11月に集結し、12月にハワイに向けて出発しました。この真珠湾攻撃から太平洋戦争が起きてしまいました。

昭和22年、択捉島から引き揚げてくるまでの2年間は、具谷でソ連軍の兵隊たちと一緒に暮らしていました。いろいろとソ連兵とのトラブルがあったようです。択捉島でも事件があり、亡くなった方もいたようです。ソ連軍が上陸後、歯舞、色丹では、島から北海道へ向けて漁船で逃

げてきた人が、半分くらいいたそうです。

島から逃げるときは、ソ連軍の監視のない海の時化た真夜中に逃げるので、逃げる途中に波にのまれ、亡くなった方もたくさんいたようです。国後島でも同様に北海道へ向けて逃げた人はたくさんいたようです。択捉島ではソ連軍による監禁状態だったので、逃げることはできませんでした。引き揚げ命令が出るまでは、監禁状態でした。

ソ連軍が上陸したときですが、鉄砲をかついだ兵隊が、いきなり土足で家に入ってきました。そのとき、姉たちは家のム口に隠し、運良く何事もなく済みました。その時、家族みなでご飯食べており、いきなり銃を頭に突きつけられました。銃を突きつけられたときは、とても恐ろしかったことを今でも思い出します。そのときソ連兵からは、「この島はソ連の領土になったのだから、私たちの指示に従わなければいけない。」と命令され、2年間ソ連軍と暮らすことになったのです。

このような状況の中、なんとか私たち一家は、引き揚げ命令が出る昭和 22 年の8月まで択捉島で暮らしました。幸い、私たち家族は何事もなく暮らすことができました。

昭和 22 年8月に引き揚げ命令が出ました。朝8時ころ、突然、今日引越しするよう命令がありました。昼にトラックが来るので、それまでに荷造りをするよう指示がありました。なにとも言えず命令に従いました。

引き揚げるとき、内保（ないぼ）という港に連れていかれ、そこでロシアの貨物船に乗せられ、樺太の真岡（まおか）というところに連れて行かれました。船内は荷物と人間で、足の踏み場のないくらい、ぎゅうぎゅう詰めでした。樺太ではブタ小屋のような収容所に入れられ、1か月くらい過ごしました。1か月後、日本の船が迎えに来てくれて、ようやく日本の地、函館に上陸しました。そして、青森に行き、翌 23 年に日高管内門別町で定住することになりました。北海道での生活は択捉島での生活と比べ、とても大変なものでした。お金もなく、働きたくても働く場所もなく、苦しい生活が続きました。北海道に上陸してからは、いろいろと生活基盤を変えながら、なんとか現在に至っています。

私は 27 歳ころまで、北方領土がソ連に占領されたのは、戦争に負けたから仕方のないことだと思っていましたが、いろいろと文献などを調べると、それは大きな間違いだと気づきました。

1855 年（安政元年）、伊豆の下田で結ばれた日魯通好条約において、択捉島をウルップ島の中間ラインに国境を定め、国際法上、北方領土は日本の領土であると認められました。

北方領土問題は戦争に負けたから仕方ないという認識を捨ててほしいと思います。北方領土は、日本とロシアとの話し合いで決定した、国際法上でも明らかに日本の領土であります。また、その領土によって領海も変わり、それが日本の財産となります。

<訪問校>

- 北見市立小泉中学校（平成24年12月12日（水））

